

氏名	王 連旺
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 甲 第 8 4 3 7 号
学位授与年月日	平成 30年 3月 23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	蘇詩及びその注解者の研究

主査	筑波大学 教授	博士（文学）	小松 建男
副査	筑波大学 教授	博士（文学）	谷口 孝介
副査	筑波大学 准教授	博士（文学）	稀代 麻也子
副査	筑波大学 教授	博士（文学）	井川 義次

論文の要旨

本論文は日本の蘇軾の詩についての抄物資料を対象とし、新たに発見した貴重な資料に基づき、その中に見いだされる趙次公をはじめとする中日の蘇詩注釈の意義を明らかにしたものである。論文の構成は以下の通りである。

序章

前篇

第一章 蘇詩注釈書としての『四河入海』

第二章 市立米沢図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残巻考

第三章 想像と真実——論「虔州八境図八首並引」——

後篇

第四章 蘇詩趙次公注新考 ——宮内庁書陵部蔵宋版旧王本の書入れを中心に——

第五章 趙次公「和蘇詩」輯考

結

序章では、蘇軾の詩に対する注解作業が、どのように進められてきたのか、また現在目睹しうる注釈書と失われてしまった注釈書にどのようなものがあるのかについて概観した上で、五山の禅僧たちが残した『四河入海』などの抄物資料が持つ蘇詩注釈史上の意義を述べる。

第一章では、蘇詩抄物資料の集大成である『四河入海』を、蘇詩注釈史の流れの中で捉え直すことで、その体例及び五山禅僧注釈の独自の価値を提示している。室町期五山の禅僧たちが、蘇軾の詩に対して一首ごとに題注・作品の構造分析、詩語や詩句の解説・校勘、詩歌全体に対する評を附すといった、詳細で多様な注釈を行っていることを具体的に明らかにし、『四河入海』に

集成されている抄物『翰苑遺芳』・『脞説』・『天下白』・『一韓聽書』それぞれの特色を明らかにしている。

第二章では、まず市立米沢図書館が所蔵する『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』（以下『集注』）残巻の書誌形態の記述、版種の特定を行っている。この『集注』のもとになったのは、十五世紀四十年代前後に朝鮮で印刷された銅活字本で、一五八五年以前に日本の越後に伝わり、曹洞宗の僧月松宗鶴が数種の東坡詩抄を類聚編纂したときに底本として用いて、和紙に張り込み余白に注を書き込み、一五八五年八月に宗虎に付与したものであることを明らかにしている。次に、『集注』に大岳周崇、瑞巖竜惺、瑞溪周鳳、蘭坡景苗、天隱竜沢、万里集九、河清祖瀏、月舟寿桂、馬、青といった十家の抄が引用されていることを明らかにしている。

第三章では、蘇詩抄物資料を利用しつつ蘇軾の「虔州八境図八首並引」における実景を見ずに作る想像的詩作と実景を見て作る真实的詩作について論じている。蘇軾がこの連作を創作したとき、彼はまだ虔州に赴いたことはなく、絵画（「虔州八境図」）のみによって詩を作っており、万里集九が「虔州八境図八首並引」について「ミヌ京モノガタリ」（未見の物事を見たように記述する）と指摘したとおり、「虔州八境図八首並引」の創作には想像による表現が多く見られ、蘇軾が「虔州八境図」から、想像力を発揮して静的画面に時間の推移・画中の人の移動及び情緒の変化・陰晴の転換・情景の移転などを巧みにを行っていることを、後に彼が実際に虔州に赴いたときに作った詩作と比較しながら指摘している。

第四章では、既に完全な形では伝わっていない趙次公注の輯佚作業を行う。これまでも趙次公の蘇詩注については、馮応榴及び小川環樹・倉田淳之助による輯佚作業が行われているが、今回はこれまでも利用されてきた（イ）『集注東坡先生詩』前後集、（ロ）諸種の旧王本、（ハ）『四河入海』以外に、新たに従来取り上げられることのなかった（ニ）宮内庁書陵部所蔵の黄善夫家塾本系統の『王状元集百家注分類東坡先生詩』の室町期の書入れも加えて調査を行い、（ニ）を中心にして、（イ）・（ロ）・（ハ）を参照するという新たな蘇詩趙次公単注本の輯校方法を提案し、その実践例として、旧王本巻十三所収の「器用」類の十首の作品の輯校作業を示している。

第五章では、初期の蘇詩注釈者として重要な人物である、趙次公について、詩人としての彼がどのように蘇詩を受容しているのかを検討している。北宋から南宋の間を生きた趙次公の詩文はほとんどが散逸してしまっている。著者は、まず文献資料などによって、趙次公は「和蘇詩」計一九五〇余首を製作しており、それは息子の趙虎によって杜詩注と合わせて刊刻され、都の臨安にも伝わったが、十三世紀半ば頃になると、私家には収蔵されたが、書肆には既に見られないものとなっていたこと、現在、中国本土では、南宋の陳思の『海棠譜』に収められた「和蘇詩」二首を見るのみであることを確認する。次に著者は『四河入海』から彼の「和蘇詩」四十八首を輯佚し、検討を加えている。趙次公の「和蘇詩」には、おおむね自注が附されており、「和蘇詩」理解の重要な資料であるばかりでなく蘇軾の詩歌を研究するうえでも極めて価値が高いこと、趙次公は蘇軾と蜀の地の文人同士として親近感が強く、蘇軾の詩歌を好んでおり、愛慕と熱意をもって蘇軾のすべての詩歌に唱和していること、趙次公の詩には、北宋と南宋の間に流行していた江西詩派の特色を備える一方、蘇軾からの影響も窺えることを明らかにしている。

結では、日本の抄物資料を蘇詩に対する初期の重要な注釈の集成として蘇詩研究に利用することが、蘇軾に近い時代の注解者達の日を通して蘇詩を今一度捉え直すことに有力な方法となることを指摘し、蘇詩研究に抄物資料が重要な意義をもつと主張する。

審査の要旨

1 批評

本論文は、これまで十分に活用されてきたとは言い難い『四河入海』など日本に残る蘇軾の詩の注釈を利用して中国では既に失われてしまった注釈の輯佚作業を進め、日中の蘇詩注解者がどのように蘇詩を読んでいたのかを明らかにした優れた論考である。

中国では優れた詩人の作品には、繰り返し注釈が試みられている。蘇軾も例外ではない。蘇詩にあつては、特に南宋の趙次公注と施顧注が蘇軾に近い時代に作成された注釈書として重要視されているが、ひとたび失われ復元が試みられている。施顧注については現在ほぼ全容を知ることができるが、趙次公注の輯佚作業はなお進行中であり、蘇軾研究における目下の重要な研究課題の一つである。趙次公注輯佚に当たっての重要資料は、五山禅僧の抄物である。はじめにこれに注目したのは小川環樹・倉田淳之助両氏で、『四河入海』から輯佚して『蘇詩佚注』（一九五六年）を公刊している。ややおくれるが中国でも一九八〇年代になると王水照氏らが『四河入海』を紹介するなど、近年注目を集めつつある分野である。

本論文は、『四河入海』から『蘇詩佚注』を補正する資料を発見するのみにとどまらず、新たに市立米沢図書館蔵『増刊校正王状元集注分類東坡先生詩』残巻、宮内庁書陵部蔵『王状元集百家注分類東坡先生詩』に残された五山禅僧の書入れが趙次公注輯佚のための有力な資料となることを発見したのは、趙次公注輯佚作業に大きな進展をもたらす優れた業績として高く評価できる。更に著者は、これらの資料について、まず文献学的調査を行い、次にこれらの書物に残された五山禅僧の注釈を相互に比較検討したうえで、自らの趙次公単注本復元のための体例を提案し、これに基づく復元案を具体的に提示したことは、趙次公注の完全な復元に向けての第一歩を記したものとして高く評価できる。

また著者は、趙次公が蘇詩に唱和した詩（「和蘇詩」）をとりあげ、和蘇詩に附せられた趙次公の自注（題注）が蘇詩解釈に重要な資料となり得ること、また蘇詩のもっとも早い時期の受容状況を知る貴重な資料であることを明らかにしている。同時代の文献によってその総数・創作時期・刊行と流伝について考察するとともに、『四河入海』諸本によって著者自ら和蘇詩四十八首を題注も含めて輯佚校訂したことは、蘇詩研究に新たな可能性を開くものである。

このように優れた論考ではあるが、なお課題も残されている。本論文において著者の精力は文献調査と輯佚にそそがれており、これらの成果を使ってどのような作品理解が可能となるのかについての考察は十分とはいえない。しかしこれは著者の今後の研鑽にまつものであって本論文の価値を何ら損なうものではない。

2 最終試験

平成30年1月19日、人文社会科学研究所科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。